

# 令和5年度若手技術者・経営者向け実践型 海外派遣プログラム報告書



公益財団法人福岡県国際交流センター

# 令和5年度若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラム

## 研修スケジュール

### 【事前研修】

日程	内容	場所
2023/12/2 (土)	事前国内研修	こくさいひろば

### 【海外派遣（ラオス）】

日程	内容	宿泊先
2024/1/14 (日)	・ 出国 ・ 現地の方との夕食会	ビエンチャン
2024/1/15 (月)	・ ラオス計画投資大臣によるセミナー・意見交換会 ・ 国連ハビタットラオス事務所職員との昼食会 ・ 現地水道局職員との夕食会	アタプ
2024/1/16 (火)	・ サナムサイ郡役場訪問 ・ 小規模給水施設視察 ・ 住宅再建地視察 ・ 太陽電池ライトのある公園視察 ・ 州政府関係者との意見交換会	パクセ
2024/1/17 (水)	・ 衛生施設視察 ・ ラオス国土交通省 (DHU) 訪問 ・ 在ラオス日本大使館訪問	機内
2024/1/18 (木)	帰国	

### 【事後研修・報告会】

日程	内容	場所
2024/1/20 (土)	第1回事後国内研修	こくさいひろば
2024/2/15 (木)	第2回事後国内研修	こくさいひろば
2024/3/8 (金)	成果報告会	こくさいひろば

令和5年度若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラム  
個人報告書

株式会社アグリツリー  
事業開発 織田和徳

帰国してからもうじき2ヶ月が経とうとしておりますが、様々なことを思い出します。

ヴィエンチャン中心街の近代的な建物（公的機関のオフィスや外国銀行の支店）と、パクセやアタブで目にした高床式・草葺き屋根・木造住居とを同時に思い出します。ラオス都庁の入り口は、大きな石の柱で支えられた空間が広がり、神殿のような、堅牢、荘厳な雰囲気がありました。一方、パクセやアタブで目にした高床式住居には四方を囲う壁がなく、裸電球の下、薪を燃やして夕食の支度をしている様子が外から伺えました。

パクセからアタブへ向かう道中、バスの窓から満点の星空が見えて美しかったことを思い出します。その時、同じ窓から鼻の奥を刺すような野焼きの煙が入ってきて、目がヒリヒリしたことも覚えています。周りには高床式住居が並び、人々が各々夕食の支度をしていましたが、この煙の中で生活することは苦しくないだろうかと心配になりました。

鈴木基義氏（ラオス計画投資大臣特別顧問）の講義でスクリーンに投影された農村の子どもたちの姿を思い出します。収量増・所得増を伴わない農村人口増化と教育施設・体制の不足により、貧困化が進行していると語る同氏の眼差しも覚えています。これらを思い出す時には、なぜか必ず、その講義の翌日の夕食にメコン川沿いのレストランで食べた驚くほど美味しい料理の味と、そのホテルの目の前に立つ美術館のような建物が現地資産家の別荘であったことを知った時の驚きを同時に思い出します。

渡航を振り返ると上記のようなことをまず思い出します。脆弱な住居、野焼きの煙、農村の貧困化、教育体制の不足といったことがイメージを伴って記憶に残っています。ラオスという国で、ビジネスを通じて、これらの改善に貢献するにはどうすればよいか？完璧な答えはないと信じて、十分な答えを出す準備が足りてないことは明らかで、モヤモヤと心に引っ掛かっています。

渡航中そして事後研修での事業構想では、このモヤモヤの一部を解消するためのアプローチを学習できたと思っています。現地で確認した事実と課題感を基礎に、社会的な課題（と思われること）を設定し、その解決に資する事業モデルを構想し、そして、その実現可能性を説得力のある聞こえ方で提示する試みを実践しました。この構想と提示には、とても多くの事実確認と工夫が必要だということを知り、とても骨の折れる作業だと感じました。

ただ、今後自分の経験や知識がより深まれば、この作業の負荷は恐らく小さくなっていくのだろうと考えもしました。今の自分にできることは限られていますが、今回の現地渡航で感じたモヤモヤが続く限りは、それが原動力となり、その解消に向けて私を動かしてくれるものだと思います。実用的な方法論や考え方を学ぶことができただけでなく、将来の原動力となり得るモヤモヤを得られたこともこの研修の大きな収穫だと考えています。

最後に、アタブの住宅再建地を訪れた日の強い日差しを思い返します。未舗装の道を進んだ時の大きな揺れと、視界を覆うほど巻き上がった茶色い土煙。その中をゆらゆらと進む私たちの車両の脇を、対向する現地の二輪車が何度も抜けていったのを思い出します。二輪車

の男性がスカーフで鼻と口を覆い、目を細めながらも何食わぬ様子で走っていた姿が印象的でした。

アタプの住宅再建地での Avi Sakar 氏（国連ハビタットラオス事務所所長）のお話も印象的でした。洪水によって流された住居の再建事業において、Build Back Better という考えのもと、未来の類似災害に対応できる設計とする（同地は10年に一度の頻度で洪水が自然発生すると目される土地だそう）だけでなく、再建住宅の内装選定に居住予定者（被災者）の意向を反映したり、建設中であってもその物件の所有権は同予定者にあることを明示するなど、被災者への精神的なケアを意識した方法を採用していました。設備的な支援では費用と効果とが直接的な関係を結びがちですが、そうではない支援（精神的ケア、情報共有、方法やシステムの改善）であれば、工夫により限られた費用でも大きな効果を生み出すことができるということの好例だと解釈しました。

昨年12月から今年3月にかけて、ラオス渡航を含む全てのプログラムが無事に、円滑に、程よい緊張感のなかで進行し、各参加者にとって実りある（私にとっては間違いなく実りある）研修となったのは、事務局、メンター、現地協力者といった方々の多大なご協力あってのことだと思います。本プログラムへ参加できとても幸運でした。この経験を今後の人生に必ず活かしてまいります。本当にありがとうございました。

以上

# 令和5年度若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラム報告書

福岡大学大学院工学研究科資源循環・環境工学専攻

梶原 尚之

## 1. はじめに

これまで私は講義、研究活動を通じて、今後、社会に出て技術者として働くために「多角的に物事をみる力」や「相手の意図を汲んで配慮する力」が必要だと考えていた。そのような状況で、福岡県と国連ハビタットが共催する海外研修が実施されると聞き、技術者として自分に足りない力を養うことを目的として若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラムへ参加するに至った。

## 2 現地の経済に関する講義

首都ビエンチャンにある起業家支援施設を訪れ、ラオス計画省政策上級顧問の鈴木氏による国内の経済状況に関する講義を受講した。講義を受講して印象的だったのは、富裕層と貧困層の深刻な経済格差と、独自の地下経済が発達していることで実質的なGDPは公表(3000USD)よりも5倍程度あることだ。確かに、研修前に調べた情報ではラオスのGDPはASEANの中で最も低くそれほど裕福な国ではない印象だった。しかし、ラオスに到着し、実際に街の様子を見ると大きなビルや高級車を見かけた。事前の情報よりも生活水準が豊かに感じ非常に驚いた。

インターネットや文献で調べた情報だけでは分からないことはたくさん有り、現地の多様なバックグラウンドを理解すること、情報を確認することが現地で事業を進めるに当たり重要であると再認識することができた。

## 3 住宅再建地見学

次に、2018年に発生した大規模洪水災害の被災地であるアタプ県サナムサイ群を訪れ、住宅再建地を見学した。再建した住宅にはラオスで昔から用いられている高床式建築が採用されていた。高床式を採用した理由は2つあり、1つ目は被災前の住環境に近づけることで被災者のストレスを緩和するため、2つ目はラオスの気候を考慮しているためであった。地域の気候や生活様式に合わせた設計が為されていることは住民たちがより快適に新しい住まいを利用することにつながる。現地住民に配慮した計画を心掛けており、受注者のニーズにこたえたサービスの提供が大切だと学んだ。海外でも国内でも使う人の気持ちに寄り添うことがよりよい計画につながると改めて感じた。

## 4 給水施設見学

電氣的な設備がない分施設のメンテナンスは比較的しやすいと感じた。国連ハビタットの業務は施設の建設だけでなく、維持管理の指導も行なう。このほかの地域では水道公社の職員ではなく、地域住民が管理している施設もある。専門家だけでなく、住民にも技術を伝えなければならないことがあることを初めて知ることができた。経験の無い人にわかりやすく伝えることは非常に難しいが、業務を円滑に進める上で非常に重要だと感じた。

### 3.4 ビエンチャン・郊外のごみ事情

私はこれまで講義や研究を通して国内の廃棄物処理について学んできた。しかし、海外のごみ処理については実際にみたことがなかったため、その処理状況に興味を持っていた。今回の研修では廃棄物分野に関するプログラムがなかった。そこで、首都ビエンチャンや郊外に滞在した空き時間を使って個人的に町のごみの様子を見て回った。

町を歩くとごみ袋が集積されていた。しかし、日本と異なり袋の種類はバラバラで、集積場所の周りには袋からこぼれたごみが散乱していた。また、道にはポイ捨てが非常に多く見られた。さらに首都ビエンチャンではし尿の匂いがかかりしていた。通常、公衆衛生に関するインフラは上水、下水そして廃棄物の順に整備されていく。し尿の匂いがするという事は下水インフラが十分に整備されていないからであり、ペットボトルごみが多いということは上水が飲めるほど安全ではなく上水インフラの整備も不十分であるからと考えられる。上下水の整備ができていない以上は廃棄物処理が行き届くまでにまだまだ時間を要すると感じた。

環境分野を担当されている大使館職員の方にラオス国内のごみ処理に対する認識について質問した。現地住民は当然ながら、廃棄物処理計画を立てるべき政府の意識も希薄であると言っており、やはり、ラオスではごみに関する公衆衛生は行き届いておらず、意識の醸成が非常に大切であると考えた。

## 4. まとめ

海外研修の全期間を通して、今後の就業時における多くの要点を学ぶことができた。

鈴木氏の講義では事前のイメージと異なることがあり、背景を理解し、情報を精査することの重要性を学んだ。住宅再建地を見学した際は被災者の事を考えた住居を見て、使う人の気持ちに寄り添った計画の重要性を再確認した。給水施設の見学で住民への説明や技術指導があることを知り、今後、専門家ではない人たちと協力して業務に携わる機会があった際は、相手に目線を合わせた分かりやすい説明を心掛けたいと感じた。

海外には多様なバックグラウンドを持つ人々や事柄があり、そのことを理解するとともに、自分自身の考えに固執するのではなく、その業務の先にいるサービスの利用者に気を配り、計画を立てていくことが業務を円滑に遂行させる鍵であることを学んだ。

また、ハビタット職員の現地での活動を見て、現地の課題解決に対する熱い想いを体感し、周囲の方々と協力し熱意を持って取り組む姿勢がより良い結果につながることを学んだ。後就業し、自身の業務に取り組む際はこうした姿勢を大切に臨みたい。

### 【謝辞】

私は今回が人生で初めての海外渡航でした。出発前は期待と不安が入り混じった心境でしたが、一生忘れることのない貴重な経験になりました。今回研修を主催し、現地での活動を支えていただいた福岡国際交流センター職員の方々や国連ハビタット職員の皆様に心より感謝申し上げます。また、研修を共にしたメンバー、研修の準備に協力していただいたその他多くの関係者の皆様へも感謝申し上げます。

## 令和5年度若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラム報告書

株式会社 大建  
渡辺 秀晴

今回、会社より本研修の紹介をいただいた際には、一技術者の卵である自分が課題解決に向けたビジネスプランの提案を行うことができるのか不安が大きかったが、会社がベトナムに会社を設立し、将来的に自分自身広いフィールドで持てる技術を発揮したいと考えていたこともあり、本研修に応募し参加することとなりました。あの時現状に甘えず参加を決意してよかったと、すべての研修を終えた今思っています。

事前研修では、白砂先生より現地で実際に体験することの意義、課題発見に関する着眼点であるペインポイントに関する講義を受けました。学生時代から社会人時代にかけて製造技術に関することを専攻してきた私にとって、ビジネスの視野が未熟であり、お金を払ってでも解決したいと感じるペインポイントを見つけることは、研修を通じて苦労する点ではありましたが、日常の意識のアンテナの感度を高める行為が新鮮で非常に有意義な講義でした。

ラオスに着いてから最初に抱いた感想は、活気に満ちているということです。

インフラの整備状況は電力を筆頭に充実しており、舗装等も不陸なく整然としており、初めの内は自分の視座ではペインポイントはあまり感じませんでした。そうした第一印象を抱いた上で、特に印象に残っている経験が二つあります。

まず一つ目が、研修二日目の鈴木先生のセミナーの内容になりますが、実際にラオスが抱えている課題を聞く中で、進む都市化に法整備・教育体制等のシステムが追い付いていない、もしくは進めることができない現状の課題があふれていることを知りました。特に、国内の大学への進学率の異常ともいえる低さは、官僚育成や優秀な人材の確保に大きな影を落としており、それが研修全体を通して感じた国内の発展に対する国内法制度やシステムの整備が進まず、形骸化している原因だと感じました。

二つ目がハビタット職員の日野さんとパクサー-ビエンチャン行きの飛行機の中で話した会話が印象に残っています。私は本業として土木の設計技術者として働いていますが、どうしてもインフラを軸とした視座で物事を見ていたが、日野さんが仰っていた、日本政府から箱ものを作ることを期待されているという話を聞いた際に、中国資本の流れ込むラオスにおいて、今本当に自分たちができることはインフラ整備といったハード面での貢献なのか、と疑問に思いました。ラオスはまだまだインフラが充実しているとは言えませんが、法の整備や教育といったソフト面との整合性を取らないままインフラ整備が進んでいる印象が強く、無秩序な状況で開発が進むことで社会環境に後々の問題を残すことになるのではないかと考えました。

上記二つの経験が、ハード面での整備ではなく、人の意識やシステムにフォーカスしたソフト面でのビジネスモデルに至った経緯となっています。

実際にラオスでは研修プログラムだったこともあるかもしれませんが、食事もおいしく、移動も快適で短期間生活する上では日本とそこまで変わらない面がありました。しかし、島国である日本と違い、近隣諸国と地続きであり影響を直接的に受けるため、抱

えている問題が横断的であり、国内だけで解決できないものが非常に多くなります。流れてくる資本や変わる環境に現状のラオスのシステムがついていけないことがとても深く印象に残っており、この問題を解決することが、ラオスの主体的な発展を考えたいうえで最も重要なことであり、早急に向き合うべきだと考えています。

研修を通じ、海外に出て現地の問題と向き合う上で、自分の技術を軸に考えることの難しさを感じました。現状のラオスでは自分の高めていきたい土木設計の技術は確かに役立つものかもしれませんが。しかし、一度自分の視座から離れてラオスを見たときに、優先的に解決すべき問題はそこではないことを研修が進み、チームのメンバーと議論していく中で強く感じました。このことは、一人で研修を受けていては決して感じることもなかった貴重な体験であり、毎夜意見交換をしあった白砂先生及び研修参加メンバーには本当に感謝しています。

最後になりますが、本研修を通じて課題を発見すること、そして解決に向けた取り組みを考えることの難しさとやりがいを与えて抱いた本研修に感謝するとともに、今回の経験を無駄にしないよう研鑽を積んでいく所存です。本当にありがとうございました。

令和 5 年度若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラム  
参加報告書

学校法人嶋田学園 福岡国土建設専門学校  
嶋田 吉敬

今回の研修プログラム参加の目的は、研修で学んだ国際的視点と課題解決ノウハウを自身の関わる事業に活かし、学校法人として社会に還元することであった。事前研修、派遣プログラム、事後研修の3段階に分かれる内容であったが、全体を通して多くを学ばせて頂いた。

**【事前研修】**

最も印象に残ったことは白砂様による講義である。アジア各国の急成長、日本企業の競争力低下といった現実を知ったうえで、新規事業検討のスキームや心構えを学び、それに基づいてラオスで課題解決ビジネスを構築するという主旨が整理できたのみならず、プログラム参加はもちろん、アジアに目を向けて行動することに対するワクワク感が増した。福岡県、ハビタット、JICA九州の皆様からお話を頂き、ラオスの概況や各組織の活動について理解が深まった。

**【派遣プログラム】**

(1日目)

福岡空港からビエンチャン・ワットタイ国際空港へ向かう。到着後、ラオス計画投資大臣の鈴木基義様と会食。会食後、ホテルにてMTGを行い、ラオスで見つけたPain(課題)の共有を行う。Painを見つける事から課題解決ビジネスを構想していく。白砂様のお話で、「シリコンバレーの企業家は気が短い」という言葉があったが、この研修においては困りごと・課題を見つけられる人間という意味で、「短気」であるように心がけた。

(2日目)

鈴木様のセミナーを受講する。歴史や地政学・財務データといった多様な切り口のラオス概況分析に加え、ご自身が学長を務められるラオスビジネス商業大学や日本企業誘致の取り組みなどまさしく鈴木様からしか伺えない貴重な内容で、その熱量にも圧倒された。特に大学進学率が減少しており1年で9つの私大が倒産した「教育の危機」のお話は自身の事業に関連していることもあり衝撃的であった。鈴木様がラオス社会の向上というビジョンに全力を懸けておられることが伺え、3時間という時間もあっという間に過ぎ去った。その後、飛行機でパクセに移動し、ハビタットラオス事務所の方々と昼食をとった。昼食後、アタプーに移動し給水施設を見学する予定であ

ったが交通事情で到着が遅くなったため、見学予定を翌日に変更し現地水道局の皆様と食事会に参加した。その後、ホテルに移動しMTGを行う。

(3日目)

アタプー役場にて、副市長より2018年に起きたダム災害とハビタット・日本政府等による住宅再建支援についてのお話を伺い、その後現地視察をする。プロジェクトにより66の住宅が再建されたという。住民の生活に合わせた建築様式にするなど住宅再建の心遣いについて知り、ハビタットの標榜する”People’s Process”の精神を感じた。その後、給水施設を見学し、州政府関係者との食事会に参加した。ホテル移動後、MTGを行った。

(4日目)

パクセの衛生施設を見学し、その後、ビエンチャンへ飛行機で移動。中央省庁に移動し、住宅都市開発省局長と面談したのち、日本大使館を訪問する。訪問後はワットタイ国際空港からハノイ空港を経由し、福岡空港へ向かう。ハノイ空港では研修の振り返りを行い、チームごとに分かれてどのようなビジネスを提案するか議論した。ハードなスケジュールが続く中、それも深夜ではあったが、それぞれ活発に意見を出し合い、ラオスの課題解決に繋がるビジネス計画の核となる”Who”と”What”のアイデアをまとめた。

#### 【事後研修・発表会】

初日については白砂様と吉本様の指導の下、チームで考えたアイデアについてビジネスモデルを作成し、それに必要な情報と確認先をまとめ、役割分担をした。発表会でのプレゼンに関する具体的なアドバイスも頂けた。その後、チームMTGを行い、おおよそのプレゼン資料を作成した。2日目は発表のリハーサルを実施した。初めて聞く方にもわかるようなスライド構成をご助言いただき、この部分も学びであった。発表会では福岡県・ハビタット・日本ラオス友好協会・福岡大学等関係者の皆様にラオス研修の報告とビジネス提案を行った。

#### 【所感】

研修において様々な”Pain”を見つけたが、最も印象に残ったものは「学校に行きたい子供が学校に行けない」ということであった。“Pain”を見つけたらまずなぜなのかを問い、どうするかを考えるが、この問題の要因は多岐にわたり、すぐに解決できないことであるので、今回の発表のテーマにはできなかつた。私は今回の研修での学びを自身の携わる学校法人事業に活かし、社会に還元していく。その意味でも、ラオス社会で心から自身が感じた”Pain”にも、自分にできる”What”を問い続け、行動していきたい。改めて、素晴らしい機会を頂いた関係者の皆様に心よりお礼をお伝えし、この報告書の結びとする。

## 令和5年度若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラム報告書

株式会社ティーティーエス企画 暮沼 宏治

この度は、貴重なプログラムに採択いただき、関係各所の皆様に心より御礼申し上げます。本プログラムに応募させていただいた動機は、令和4年度海外派遣プログラムに参加した弊社取締役から推薦を受けたのと同時に、これまで「観光」として海外を訪問することが多く、「ビジネス構築」の観点で訪問できることが自分自身の経験値につながると感じたからです。私の所感を下記に述べさせていただきます。

### 【事前研修】

これまで国際協力の経験がなかったことから、国際連合に数多くの機関があり、それぞれ担当のSDGsが存在することすら初めて認識し、国連ハビタットの活動を認識するいい機会になりました。特に、SDGsの前身であるMDGsでは、掲げた8つの目標に対して多くの成果を挙げると同時に、格差を浮き彫りにしたことを教訓にSDGsでは「誰ひとり残さないこと」を重きに活動しているという言葉が印象的でした。ラオスに対しての第一印象は、日本に置き換えると国土面積が本州の国土面積と同等にもかかわらず人口が愛知県の人口と同等ということで、内陸国という土地柄と人口の少なさに起因してカントリーリスクが高いと考えられ、ラオスに対しての投資を妨げているのではないかと考えました。

### 【実地研修】

まず現地に到着して感じたことは、街中の広告にはBYDなど中国資本が多く、ラオス鉄道など中国が積極的に投資している印象を受けました。ただ、ビエンチャン国際空港やラオス日本大橋など日本からの資金提供を受けて建設したプロジェクトも多数存在し、そこには日本との友好を示す石碑があり、中国に遅ればせながら日本も積極的に投資していることを確認できました。

2日目のラオスビジネス商業大学鈴木学長の講義は、ラオスの現状及びこれからの展望を知るうえで非常に有意義な時間を過ごせました。特に教育の分野において、学生が集まらず私立大学9大学が閉鎖し、高校卒業後にタイに出稼ぎに行く若者が多くなったため、国立大学4大学も定員割れの現状に対してラオスという国に危機感を抱いていることを熱心に講義いただいたことが印象的でした。

国連ハビタットの活動としては、3日目に訪問させていただいた復興住宅地の再建現場にて、ダムが決壊して住居を失った方々に単に住居を提供するのではなく、「住居に親しみを持ってほしい」という思いから、壁紙の色など住居者の要望を取り入れながら建設したエピソードを聞き、現地の人々に寄り添った活動をしていることに胸を

打たれました。

### 【総括】

実地調査では、ラオス国内の社会課題・問題を目の当たりにし、容易に課題を解決できる「ビジネス」など一つもないと痛感しました。最終日に、訪問した中央省庁との会談で、「ゴミが散乱している」＝「都市の証拠」という言葉が示すように、ラオスの方々には、町中にゴミが散乱しているのが「当たり前」であって、幸福の価値観など人それぞれだと再認識させられました。その中でも、ラオスの方々にメリットが生まれ、国連ハビタットのSDGs 担当である「11. 住み続けられるまちづくりを」を実現するためには、ラオス政府（自治体）、現地の方々と三位一体となって協力していくことが必須であり、今回研修を通していただいたご縁を大切に弊社のリソースである再生可能エネルギー事業含め海外でも新たなビジネスを構築できるよう邁進してまいります。

末尾になりますが、令和5年度若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラムにご支援いただいた関係各所の皆様、参加者の皆様に御礼を申し上げますとともに、これからもご支援いただけますようお願い申し上げます。

以上

## 海外派遣プログラム in ラオスを経て

福岡大学大学院工学研究科循環資源・環境工学専攻環境生態制御専修

河合俊賢

はじめに、令和5年度若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラムに参加させていただき誠にありがとうございました。日本での生活のルーティーンから抜け出し、海外で数日過ごした日々は新鮮で刺激を受ける毎日でした。特に、発展途上国を訪れるのは初めてで、貧富の差、衛生状況、インフラ設備、食事等の日本とは全く異なった生活環境に驚かされる日々でした。

成果報告会においても取り上げた、国内通過 (kip) の暴落、デング熱に特に関心を持ちました。なぜなら、日本で生活をしていてそれらの問題は、なんとなくのイメージはあるものの、他人事であり、関係のないことだと考えていたからです。しかし、現地では、kip 価値の下落によって、生活が脅かされていたり、デング熱の流行によって、死者が出てしまっていたりと深刻な問題として捉えられていました。百聞は一見にしかずと言いますが、教科書や先生方から見たり聞いたりしていたその現状が目の前にあることで、今まで想像の中の世界であったものが具現化され、自分の中にしっかりとインストールされた気分になりました。無限に広がる世界は、我々人間の寿命、技術では、到底全てを知ることができません。しかし、自分の人生のなかで、少しでも世界を知り、人生をアップデートしていくためには、積極的に行動の幅を広げ、海外への挑戦も必要であることを本プログラムの学びの中で認識しました。

一方、研修を更に充実させるために、観光客が訪れるような場所も視察があればよいと思いました。今回の研修は、比較的、政府、インフラ、衛生等に関する視察がほとんどでした。観光客が訪れるようなところは、空港、ホテル、レストランぐらいであったと思います。技術者向けの研修であれば、今回の研究のような訪問地の選択は妥当であると思いますが、経営者向けの面を考えると人が多く集まる観光スポットの視察は必要なのではないかと感じました。また、実際に観光客へのインタビュー等によって気がつかなかった pain の採掘に繋がると考えます。政府などの公的の人物の話と住民や観光客の声を比較・検討することが、本プログラムの目的の一つであるビジネスプランを考える上では、必須なのではないか考えた次第です。

いずれにしても、本プログラムを通して経験、考察したこと、出会いは、今後の人生において、大きな意味をもたらしたと思います。改めて、本プログラムを発足、サポートして頂いた方々、ともに参加し、学びあったメンバーに心より感謝申し上げます。

す。

今後、本プログラムが、多くの人の世界を広げ、世界の笑顔の数が増えるような人材を育成して頂けることを願っています。

## ■ 事前国内研修の様子



左：国連ハビタットによる講義  
右：グループワークセッション

## ■ 海外派遣（ラオス）の様子



左：ラオス計画投資大臣によるセミナー  
右：アタプの住宅再建地視察



左：アタプの小規模給水施設視察  
右：バクセの衛生施設視察

## ■ 事後国内研修の様子



## ■ 成果報告会の様子

